



慶應義塾大学ビジネス・スクール

演技をしている自分がいると訴える男性

主訴：会社では評価され、期待されているが、それがそんなに嬉しい。現実が空虚に見えてきて、何をやっても「やり遂げた」という実感がない。「何か他に自分が目指すべき道があるのではないか」と考えるが、見えてこない。出世も仕事もお金もそんなに魅力的ではない。銀行で知り合った女性と交際しているが、向こうは熱をあげているのにこちらはのってゆけない。会社では、そんなことを考えていると思われると評価が悪くなるから、さも「仕事を楽しんでいる」、というふうに「演技」している。その「演技」をしている自分を冷ややかに見ている自分がいる。時々、「やらなければならない何かがあるはずだ」と焦ることもあるが、具体的にはならない。「ずるずると銀行員をやるのかなあ……。優秀な行員という仮面を一生かぶって」。

生育歴：27歳の男性。独身。銀行員。関西の私立大学の経済学部を卒業。「優」の数が多く、学校の推薦を受けて「人もうらやむ」都市銀行に5年前に入行。父親は商社マン。取締役まで登りつめて、今は子会社の副社長をしている。母親は専業主婦。姉（30歳）がいるが、最近結婚して他家に嫁いだ。関西の「中の上」の住宅地に住んで、ずっとそこで大きくなった。途中父親の仕事の都合で、ロンドンで4年間暮らした。父親、母親ともに常識的な人。ずっと平均以上の裕福な暮らしをしてきた。困難らしい困難にも遭遇したことがない。反抗期らしい反抗期もなかった。大学では英語クラブ（ESS）に所属し、ディベート部の主将を任せられた。英語は何も準備しなくとも普通に話せる。背が高く、ハンサムで、大学・社会人と、多くの女性が交際を求めてきたが、特には関心が湧かなかった。銀行入行後は、家から30分の大坂支店で、外国為替の業務についていた。「英語が活用できるから」という理由で何となく希望を出したらそのまま通ってしまった。同期の仲間からは、「外回りのない内勤でいいなあ」と羨ましがられたが、特に感慨はなかった。初めて就いた上司や、職場の先輩・仲間にも恵まれ、仕事をしてきた。普通にやるのだが、人より飲み込みがよかつたり、手際がよかつたりして、上司から随分誉められた。今でも「頭のよい、

このケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールの渡辺直登教授が作成した。ケースに記載されている個人情報については、本人および関係者の尊厳と秘密を保護するため、当事者の了解のもと事実から逸脱しない程度に偽装されている。